

Research on the structure of home-based nursing care provided by family caregivers responsible for dialysis patients requiring nursing care

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hayashi, Kazumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/19522

平成20年8月25日

博士論文審査結果報告書

報告番号 医博甲第 1987 号

学籍番号

氏名 林 一美

論文審査員

主査(教授) 稲垣 美智子

副査(教授) 長谷川 雅美

副査(教授) 塚崎 恵子

論文題名: Research on the structure of home-based nursing care provided by family

caregivers responsible for dialysis patients requiring nursing care

論文審査結果

高齢社会と透析技術の進歩により、介護を必要とする透析患者（要介護透析患者）は増加しており今後増すなす増加が予測される。要介護透析患者の実態は明らかになっておらず、その支援についても明らかにされていない。本研究は、石川県内 10 透析センターに通院治療中の要介護透析患者を介護している家族介護者 22 名（平均年齢は 61.7 歳、男性 3 名、女性 19 名。介護している要介護透析患者の平均年齢は、77.6 歳）を対象に、要介護透析患者にかかわる家族介護者の在宅介護の構造を、介護の様相、認識、家族介護者自身の生活への影響から、修正版グラデッド・セオリー・アプローチでデータ分析により明らかにした。その結果、「透析介護への自己投入」「介護体制を整えていく・療養の要領をつかむ」「介護と生活が落ち着く」という経緯をもった構造が示された。この構造は《余命を意識した介護》をコアカテゴリーとする積極的な取り組みにより獲得していく様相として説明され、「在宅介護獲得プロセス」と命名した。「介護体制を整えていく・療養の要領をつかむ」に見られる<生活様式の転換>、<透析介護に関する要領の体得>、<透析時間に合わせた生活時間の調整>は二人以上の協力者、生活様式を変更可能な経済力、要領の体得を許す関係などの条件が必要なことを示唆された。また「介護と生活が落ち着く」となっても介護役割困難感 は継続されることが示された。

本論文の独創性および保健学における意義は、要介護透析患者に関する研究は皆無に等しく、医療費や施設開設など多くの課題をもつ透析医療に重要な貢献が考えられる。本研究結果は、看護のみならず、広く保健学、行政関係においても結果活用および今後の研究発展に様々な視点を与える極めて重要な視点を示した。

したがって、本論文は博士論文としてふさわしく博士（保健学）を授与するに値すると評価した。